

<学術論文>

## 「N ってある」文における N の主題性

### —主題文の使用条件とその逸脱が許容される文の特性の観点から—

近藤 真衣 信州大学大学院教育学研究科国語教育専修

キーワード:「N ってある」文, 主題文の使用条件, 使用条件の逸脱, 叙述の類型

#### 1. はじめに

話し言葉において頻繁に使用される助詞「って」には、主題提示の用法があるとされている。しかし一見主題提示の用法と同じ形式に見える名詞 N に「って」が後接している文の中には、先行研究において主題文か否かで意見が対立する文が存在する。それが本稿で扱う「N ってある」文である。本稿では「N ってある」文が主題文か否かを明らかにすることを目的とする。本稿の構成は以下の通りである。

2.では名詞に「って」が後接している文における先行研究の対立を示すとともに、研究対象とする「N ってある」文の定義を示す。3.では主題となる名詞の観点から主題文の典型である「は」主題文の成立条件、使用条件を明らかにする。これに基づき、「って」に前接する名詞が話し手(書き手)が指示対象を特定できるものであるという主題文の成立条件(3.2 参照)および、聞き手(読み手)の意識にあると話し手(書き手)が推測するものであるという主題文の使用条件(3.3 参照)を満たしている「N ってある」文は主題文であることを示す。4.では、使用条件を逸脱している文について、述語の観点から主題文か否かを考察する。文の中には、その性質上必ず主題文の形になるものが存在する。本稿ではそのような文として、「述部に疑問詞を含む疑問文および真偽疑問文」と、「属性叙述文」をあげる(4.2, 4.3 参照)。二つのうち形式で判断が可能な、述部に疑問詞を含む疑問文および真偽疑問文である「N ってある」文は主題文であると主張する。5.では、使用条件を逸脱した「N ってある」文から述部に疑問詞を含む疑問文および真偽疑問文を除いたものを研究対象とする。益岡(2000)の叙述の類型と主題文の関係についての考察をもとに、それらが超時的な事柄を表す属性叙述文であれば主題文であり、一時的な事柄を表す事象叙述文であれば主題文ではないと判断する。その結果事象叙述文的な「N ってある」文が存在することが明らかとなった。このことから「N ってある」文には主題文ではない可能性が高い文が存在することを主張する。

#### 2. 「って」主題文における先行研究の対立<sup>1</sup>

##### 2.1 主題文とは

問題に移る前に、まず主題文についてその概要を示す。本稿では、丹羽(2000)を参考に主題文を以下のように定める。

(1) 地球は青い。

(2) 山田は沖縄へ旅行に行った。

(1)(2)の「地球」「山田」の部分为主题とし、「青い」「沖縄へ旅行に行った」の部分进行解说とする。主题文とは、主题についてそれがどうであるか、どうなったかという解说を与えている文のことである。(2)と同じような内容は、(2)のように主题文ではない形(无题文)で表すことも可能である。

(2') 山田が沖縄へ旅行に行った。

このように无题文の形で表すことが可能な中で、どのような場合に主题文の形で表されるのかということが本稿において重要な点である。これについては3.で詳しく取り上げる。

益岡・田窪(1992)や野田(1996)は、主题は典型的には「は」で表されると述べるが、日本語記述文法研究会(编)(2009)などは、「って」「とは」「なら」などにも主题を表す働きがあると述べている。本稿では、「って」を用いた主题文を研究对象として扱う。

## 2.2 先行研究の対立

丹羽(1994)は、主题提示の「って」を次のように分類している。

### ①言葉を再現して提示する「って」

①は、(3)のように話し手が知らない言葉をそのまま引用して提示する用法である。

(3) 「この問題はゲノムの構造から考えた方がいいな。」「ゲノムって何？」

(3)は、「ゲノム」がどういう意味であるかわからず、その言葉を主题として提示して述部でその意味を问题にしている。知らない言葉を用いる場合「ゲノムは何？」と言うのは不自然であり、引用を表す形式である「って」「というのは」などを用いなければならない。

### ②捉え直しを表す「って」

②は「って」に前接する名詞の意味がわかっていて、その名詞に対して新たな観点から捉え直した意味を付け加える時に用いられるものである。②は次の二つに分類される。

#### [属性の捉え直し]

(4) 人間って本当に高等生物なのかな？

(4)は「人間」がどのようなものか、という内実を捉え直している文である。

#### [存否の捉え直し]

(5) 誰かB型の人っていますか？

(5)は、「B型の人」が存在するか否かを捉え直している文である。

丹羽(1994)は捉え直しの用法について、引用形式を用いずに「人間は高等生物なの？」「B型の人はいいますか？」ということもできると述べる。ただし、存否を问题にする場合の多くは「は」が用いられず「って」が用いられるとして(6)をあげている。

(6) 焼肉食い放題ってあるじゃない。あれで、食べきれずに苦しんでいる人が、よく

いますよ。

主題提示の「って」について述べている他の先行研究として、日本語記述文法研究会(編)(2009)があげられる。日本語記述文法研究会(編)(2009)で述べられている「って」の用法も、丹羽(1994)であげられているそれと大差はない。ただし、日本語記述文法研究会(編)(2009)では、丹羽(1994)が存否の捉え直しの主題文であるとしている(6)と形式的に類似している(7)を、主題文ではないとしている。

(7) 駅前にみどりスーパーってあるだろ。あそこ、来週閉店するらしいよ。

日本語記述文法研究会(編)(2009)は、(7)は話し手が、聞き手が知っているかわからないものやその時聞き手の意識のうちにはないと思われるものを文脈に導入する発話であるとし、くだけた話し言葉では名詞が「って」によって提示されていても主題を表していない場合があるということを主張している。

このように(6)と(7)はともに「って」に存在を表す「ある」という動詞が後接しているという点で形式的には類似しているが、先行研究において主題文として扱うか否かという点で意見に対立が見られる。しかし、どちらの先行研究も(6)(7)について主題文か否かははっきり判断できるほどの根拠はあげていない。よって(6)(7)のような文が主題文か否かを明確な根拠をもって明らかにし、どちらかの研究に再考の必要性を示す必要があると思われる。

## 2.3 研究対象の定義

先行研究に対立が見られるのは、名詞に「って」が後接している文のうち述語に存在を表す動詞「ある」が用いられている文である。本稿ではそのような文を「N ってある」文とし、研究対象として扱う。ただし、「N ってある」文は「って」に前接する名詞の存在を述べる文に限るとする。よって、日本語記述文法研究会(編)(2009)があげている(8)は研究対象として扱わない。

(8) へえ、キウイの木って雌雄があるのか。知らなかった。

(8)は「キウイの木」の存在ではなく「雌雄」の存在を述べているものである。日本語記述文法研究会(編)(2009)は(8)を主題文として扱っており、丹羽(1994)との認識のずれはない。また今回は、同じ存在動詞である「いる」が用いられている文およびテンスが関与する「あった」「いた」が用いられている文も研究対象に含める。いずれも便宜上「N ってある」文として扱う。

## 3. 主題文の性質

### 3.1 「は」主題文の性質に関する先行研究

野田(1996)は、主題文と無題文の使い分けについて述語の観点、主格名詞の観点、文の機能の観点など、様々な観点から考察を行っている。本稿では主格名詞の観点と述語の観点に絞って考察を進めることとする。この二つの観点から見た主題文の性質は野田(1996)の他にも益岡・田窪(1992)、丹羽(2000)、日本語記述文法研究会(編)(2009)、白川(監)(2001)



などでも述べられており、一般的な観点だといえるだろう。3.では名詞(多くの先行研究では主格名詞に絞っていないため、以下からは「名詞」とする)の観点についてとりあげ、述語の観点については4.で取り上げる。

野田(1996)は「誰か」、「何か」、「知らない人」のように何を指すのか特定できない不定名詞は(9)のように必ず無題文となり、主題文の形で表すと(9)のように不自然になると述べている。

(9) 十一時に誰かがやってきた。

(9)\*<sup>2</sup>十一時に誰かはやってきた。

これに対し、(10)のような初めて文脈に現れる名詞は無題文になりやすいと述べている。

(10) ところが、その翌年、一九八九年の初夏にパソコン雑誌で「サージョンウイルス」が騒がれたした。

(山本隆雄(他))『コンピュータ・ウイルス』, p.15)

この、「必ず無題文になる」と「無題文になりやすい」には大きな違いがあるように思える。

(9)は、主題文の形にした時に単独の文として成立していない。これに対し、(10)を主題文の形にした(10')は単独の文として成立する。

(10') ところが、その翌年、一九八九年の初夏にパソコン雑誌で「サージョンウイルス」は騒がれたした。

このことから、野田の言う必ず無題文になる名詞とは主題文の形にした時に単独の文として成立しない名詞であり、無題文になりやすい名詞とは、主題文の形にした時に単独の文として成立する名詞であるといえる。本稿ではこの二つを区別して考える。

### 3.2 「は」主題文の成立条件

3.1で述べたように、(9)の「誰か」のように何を指すのか特定できない不定名詞は「は」主題文の形で表すと単独の文として成立しない。このことから、主題文が成立するためには(ア)の成立条件があるといえる。

(ア) 主題文の成立条件: 主題となる名詞は話し手(書き手)が指示対象を特定できるものである。<sup>3</sup>

多くの名詞はこの成立条件を満たしており、満たしていない名詞には限りがあるため、本稿では成立条件を満たしていない名詞のみをあげる。成立条件を満たす名詞の具体例については、近藤(2012)で述べた。寺村(1991)は主題に適さない名詞として不特定の対象を指示する機能をもつ名詞をあげている。具体的には次のようなものである。

不定名詞: どれ、だれ、なに、いつ

複合不定名詞: どれか、だれか、なにか、どこか、(いつか)

どれも、だれも、なんにも、どこも、いつも

不定名詞句(不定指示詞+名詞): どんな男、どの大学、など (p.45)

寺村(1991)ではあげられていないが、野田(1996)があげる「知らない人」も不特定の対象

を指示する機能をもつ名詞であるといえるだろう。これらの名詞は成立条件を満たさない。

### 3.3 「は」主題文の使用条件

3.2 では主題文が単独の文として成立するための条件を述べたが、これだけでは主題文の性質を十分に明らかにできたとはいえず、次のような問題が残る。それは、指示対象を特定できる名詞を主題にした主題文をどのような文脈・状況で使うことが可能かという問題である。例えば、指示対象を特定できる固有名詞を用いた(11)の文を、話の冒頭でいきなり持ち出すことは可能であろうか。

(11) (外出先で知り合いの田中さんと出会っていきなり)佐藤さんは優しいですね。  
この時、「田中さん」は唐突に感じるであろう。このことについては尾上(2004)が次のように述べている。

「今日は木曜日です」といきなり言っても不自然ではないが、「ラジオ体操はやりました」といきなり言うのは極めて不自然である。文頭の名詞項に「は」をつけて「XハY」という形の文をつくることはいつでもできるし、その文は日本語の文の形として常に許される形であるが、言語上に名詞項 X を表現の前提として持ち出す(中略)ことが自然な場合と不自然な場合があるということである。(p.28-29)

このことから、主題文にはそれを自然に持ち出すための使用条件があると考えられる。野田(1996)は聞き手の意識にあると思われる名詞は文章・談話の最初の文でも主題になりやすいと述べる。(11)で聞き手が唐突に感じるのは、その時意識になかった名詞が主題として持ち出されたからであろう。よって主題文の使用条件を(イ)と定める。

(イ) 主題文の使用条件: 主題となる名詞は、聞き手(読み手)の意識にあると話し手(書き手)が推測するものである。

ただし、(イ)は抽象的な条件であるため、以下では尾上(1995)をもとに(イ)を満たす名詞を具体的に明らかにする。

尾上(1995)は、どのような語が題目になり得るかという条件を文脈、状況の観点から次の三種類に整理している。

- a その語そのものが場に既出である。(いわゆる“既知”項目)
- b その語に関係する項目が場に既出である。

「メロンが好きなんだってな」「いや、くだものはみんな好きです」

- c 発話の現場・話し手・聞き手に関わるもの、あるいは発話の「いま、ここ」との関係が明示された語である。

「私の故郷は大阪です」／「この教室は暑いね」／「来年は父の還暦です」

(p.34)

尾上(1995)の条件を満たす名詞は聞き手(読み手)の意識にあがりやすい名詞に思える。しかし a の「場」および b の「関係する項目」の定義が不鮮明であるという点に不備がみられる。本稿ではこれを修正し、主題文の使用条件(イ)を満たす名詞の具体例を次の(ウ)～(ク)

と定める。

(ウ) 前の文脈に既出であるもの

(12) 私の友人に太郎という人がいる。太郎はとても優しい人だ。

(12)の第二文の「太郎」は第一文に既出である。尾上(1995)の条件 a, b には「場に既出」という言葉がみられるが、この「場」とは文脈と場面両方を指していると思われる。しかし(エ)で述べるが、本研究では文脈と場面では使用条件が異なると考えるため、二つを分けて示す。

(エ) 場面にあるものの中で聞き手が見ている(注目している)もの

(13) これは花子のかばんです。

尾上(1995)は、場に既出であれば条件を満たすとしているが、場面にあるだけでは自然に主題文として持ち出すことはできない。たとえば(13)を夕飯のメニューの話をしている時にいきなり言うのは不自然である。(13)が自然に持ち出されるためには、聞き手がかばんをじっと見つめているというような状況、もしくは「君、こんなかばんもっていたっけ？」のような、聞き手が「これ」に注目していることがわかる文脈が必要である。

(オ) 聞き手(読み手)もしくは話し手(書き手)を表すもの

(14) 私は田中一郎といいます。

一対一で会話をする場合、話し手と聞き手はいつもお互いの意識にあるため主題文として持ち出すことができる。多数で会話をする場合、話し手は話し始めた時点で聞き手の意識にあがるが、話し手以外を主題文として持ち出すためには、(エ)と同じように主題として取り上げたいものに注目させるための段階が必要である。

(カ) (ウ)(エ)(オ)に当てはまる名詞と修飾関係にあるもの

尾上(1995)の「その語に関係する項目が場に既出であるもの」は具体的にどのようなものかがはっきりしていない。そこで本稿ではその具体例の一つを(カ)とする。野田(1996)は、主題になりやすい名詞として話の現場や前の文脈と関係のある名詞をあげ、(15)をあげている。

(15) パイロットの家庭は、大変なんだ。原因は全て時差にある。

(鎌田慧(編)『日本人の仕事』, p.259)

野田(1996)は、この「原因」は「パイロットの家庭が大変な原因」であり、前の文と関係があるとしている。「パイロットの家庭が大変な」は「原因」を修飾する関係にある。

(キ) (ウ)(エ)(オ)に当てはまる名詞の上位概念、下位概念であるもの

尾上(1995)の「その語に関係する項目が場に既出であるもの」のもう一つの具体例を(キ)とする。先に述べた尾上(1995)であげられている例の「くだもの」は「メロン」の上位概念だと思われる。

(ク) 情報伝達の場合からして、出てくることが予想されるもの

野田(1996)では、首相や大臣、官公庁など、その動向がいつも注目されているとみなされる名詞は、新聞やテレビのニュースの最初の文で主題になることができると述べている。



普段の会話の冒頭で主題文として出したら唐突に思われる名詞でも情報伝達の場によっては唐突にならないこともあるといえる。

以上、主題文の使用条件をあげたが、次の二点に注意したい。一点目は、その名詞が意識にあがっているかどうかの判断は話し手(書き手)にゆだねられており、実際聞き手(読み手)の意識にあがっていないとしても主題文の形で用いてしまうということもあるという点である。二点目は、これらの条件が排他的なものではなく、重複することもありうるという点である。例えば(エ)は、(オ)と重複する。

また、この主題文の使用条件は単に、関連のあることを話さなければならないという会話の原則なのではないかという意見もあるかもしれない。しかし、本稿では主題文の使用条件と会話の原則は別のものであると考える。例えば、「誰かが来たの?」と聞かれた時に「田中さんが来たよ」と答えるのは自然だが、「田中さんは来たよ」と答えるのは不自然である。つまり、関連のあることを話すという会話の原則に則っているだけでは、主題文を使用することができないということである。これに対し、「田中さんは来た?」と聞かれたのに対して「田中さんは二時間前に来たよ」と答えるのは自然である。これは、会話の原則と主題文の使用条件をともに満たしているからである。

### 3.4 「は」主題文と「って」主題文

ここまで「は」主題文の成立条件と使用条件を明らかにしてきたが、ここからは主題文の使用条件に重点をおいて考察を進める。成立条件を満たさない名詞を主題とした文は単独の文として成立しないため、実際に使用されることはない。よって主題文か否かの判断に成立条件を用いる必要はないのである。

また、「は」主題文は主題文の典型的な形である。よって本稿では、本稿において明らかにした「は」主題文の使用条件は「って」主題文にも課せられると考える。例えば、(16)を「田中さん」とは全く関係ない話をしている時に出了たら聞き手は唐突に感じるであろう。

(16) #田中さんって優しいよね。

このことから、(17)(18)のような「N ってある」文は使用条件が満たされているため主題文であるといえる。

(17) 譲ってはいけないもの。そういうものってありますよね?

(伊坂幸太郎(2005)『ラッシュライフ』, 新潮文庫, p.448)

(18) 長蘭:(省略)『絵描きの植田さん』はどういう経緯で実現されたんですか?

いしい:『絵描きの植田さん』って,『プラネタリウムのふたご』と『ポーの話』の間にあるんですけど、あれは「植田誠さんといしいさんとで本を作りたい」という連絡をポプラ社の方からいただいて、初めて植田さんと横浜の喫茶店で会ったんですよ。

(インタビュー(著者不明)(2006)『文藝』第45巻第3号, 河出書房新社, p.78)

#### 4. 主題文の使用条件の逸脱

##### 4.1 使用条件の逸脱が許容される文<sup>4</sup>

3.では、主題となる名詞の観点から主題文の使用条件を明らかにし、「N っている文」が主題文であるか否かを考察してきた。しかし、主題文と無題文の使い分けには、名詞以外にも要因がある。よってここからは、述語の観点から使用条件を逸脱した「N っている」文が主題文か否かを考察する。

基本的に、使用条件を満たさない名詞を主題文の形で表すと(19)のように不自然になる。その場合、(19)のように無題文の形で表すことが選択されることになる。

(19)\*あつ！田中くんは走ってる！

(19') あつ！田中くんが走ってる！

しかし文の中には、その性質上無題文の形にできず、必ず主題文の形になるものが存在する。(20)がその例であり、「は」を「が」で表すと(20')のように不自然な文となる。

(20) 田中君は何時に来るの？

(20')\*田中君が何時に来るの？

本稿ではこのような性質上必ず主題文の形になる文として「述部に疑問詞を含む疑問文および真偽疑問文」、「属性叙述文」をあげる。使用条件を逸脱した「N っている」文がこの二つの文のどちらかに当てはまる文ならば、その「N っている」文は主題文であるということになる。4.2, 4.3 ではそれぞれの文について具体的に述べていく。

##### 4.2 述部に疑問詞を含む疑問文および真偽疑問文

寺村(1991)は、「述部にダレ、ナニ、ドコ、イツなどや、それらからなる名詞句が含まれている疑問文では、それと結びつく主格の名詞句は、「X ハ」となる」(p.53)と述べ、(21)を例にあげている。

(21) 山田君はどこにいますか。

また益岡(1991)は、「真偽判断が関与する疑問文は、一般に有題である」(p.128)として、(22)を例にあげている。

(22) 太郎はパーティーに出席しましたか。

(21)も(22)も無題文の形で表すと(21')(22')のように不自然になる。

(21')\*山田君がどこにいますか。

(22')\*太郎がパーティーに出席しましたか。

このことから、述部に疑問詞を含む疑問文および真偽疑問文は、必ず主題文になると考えられる。よって、真偽疑問文である(23)は主題文であるといえる。

(23) ツーマー、オリーブオイルってあるー？

(西加奈子(2008)『きいろいゾウ』, 小学館, p.105)

また実例は今回見つからなかったが、(24)のような述部に疑問詞を含む「N っている」文



も主題文であるといえるだろう。

(24) オリーブオイルってどこにある？

### 4.3 属性叙述文

益岡(1987)は叙述には属性叙述と事象叙述という2つの類型が存在すると述べている。属性叙述とは「現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取り上げ、それが有する何らかの属性を述べる」(p.21)ものであるとし、「属性叙述文」として(25)をあげている。

(25) その男は優しい。

また、その特徴として「一般に対象表示成分が「主題」(名詞+「ハ」)の形式で表される」(p.23)ということあげている。一方事象叙述とは「現実世界の或る時空間に実現・実在する事象(出来事や静的事態)を叙述する」(p.21)ものであるとし、「事象叙述文」として(26)をあげている。

(26) 雷が落ちた。

また、益岡(2000)では(27)のような属性叙述文を無題文の形で表した(27)は指定文であり、属性叙述文や事象叙述文とは区別すべきであるとしている。

(27) 鈴木先生は生徒に優しい。

(27) 鈴木先生が生徒に優しい。

このことから益岡(2000)は、属性叙述文を無題文の形で表すと指定文となってしまうため、属性叙述文は原則として主題文となるということを主張している。これに従うと、属性叙述文であるといえる「Nってある」文は主題文であるということになる。

## 5. 「Nってある」文の叙述の類型

### 5.1 研究対象の限定

4.では使用条件の逸脱が許容される文について述べたが、一つ問題が残る。それは、述部に疑問詞を含む疑問文および真偽疑問文が形式で判断可能であるのに対し、属性叙述文か否かの判断は形式だけでは不可能であるという点である。よってここからは研究対象を「主題文の使用条件を逸脱している文のうち、述部に疑問詞を含む疑問文および真偽疑問文以外の「Nってある」文」に限定しそれが属性叙述文か否かを5.3において考察する。先行研究に対立が見られる(6)(7)も、研究対象に含まれる。

(6) 焼肉食い放題ってあるじゃない。あれで、食いきれずに苦しんでいる人が、よくいますよ。

(7) 駅前にみどりスーパーってあるだろ。あそこ、来週閉店するらしいよ。

(6)(7)は相手への問いかけを行っている文だが、述部に疑問詞を含む疑問文および真偽疑問文とは区別する。仁田(1991)は、(7)のような上昇イントネーションの「だろう」や「でしょう」、「よね」が用いられた文を〈擬似疑問〉の文として、典型的な疑問表現と区別して

いる。仁田(1991)は〈擬似疑問〉とは、話し手の判断の成立に対する〈疑い〉が消滅化・希薄化したものであり、相手に確認や同意を要求するものであると述べる。また、(6)のような否定疑問文は、話し手が「事態の成立・不成立に関してある傾き・予測を持って発する」(p.149)場合によく用いられると述べる。(6)の「じゃない」は否定の形をとっているが、話し手の期待する答えは肯定の答えである。仁田(1991)はこのような文を〈傾きを有する問いかけ〉とし、確認・同意要求の〈擬似疑問〉と密接に関係があると述べる。

このように、〈擬似疑問〉である(7)や〈傾きを有する問いかけ〉である(6)は、その判断の全てを話し手にゆだねていないという点で、述部に疑問詞を含む疑問文および真偽疑問文とは区別する必要がある。また、〈擬似疑問〉や〈傾きを有する問いかけ〉は(28)のように無題文の形で表すことができることから、性質上必ず主題文の形になる文というわけではない。

(28) よく見ろよ、雨がふっているだろ。

(仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房、p.153)

よってこれらは研究対象に含める。

## 5.2 叙述の類型とテンスの関わり

5.3 で研究対象の「N ってある」文が主題文か否か判断するために、ここでは属性叙述文と事象叙述文をどのようにに区別するのかを、益岡(2000)を参考にまとめる。

益岡(2000)は、属性叙述文には典型的なものとそうではないものがあるとして、テンスとの関わりとからめて述べている。まず、(29)のような対象の恒常的、超時的な属性を表す「内在的属性叙述」はテンスが関与せず、典型的な属性叙述文であるとしている。

(29) 日本は島国だ。

日本が島国であるということはずっと変わらないことであるため、(29)は恒常的な属性を表しているといえる。

一方(30)のような可変的な属性を表す「非内在的属性叙述」は、テンスを介入させることが可能であり、典型的な属性叙述文からは少しずれた位置にあるとしている。

(30) 花子は今日はおとなしい。

(30)は「今日」という一定の時間のみの「花子」の属性を表している。

ただし、内在的であるか否かは程度の問題であり、内在的属性と非内在的属性とは連続的な関係にあるとも述べている。

対して事象叙述文は叙述される事態は時間の流れの中に具現化されるものであり、時間を超越することはなく、常にテンス性を帯びると述べている。(31)がその例である。

(31) 予定の時間に会議が始まった。

(31)は会議が始まった一瞬の時間の出来事を表している。

以上をまとめると、テンスが関与しない超時的・恒常的なことを表す文ほど属性叙述文的な文であり、テンスが関与する一時的なことを表す文ほど事象叙述文的な文であるとい

うことになる。

### 5.3 「Nってある」文の叙述の種類

ここでは、テンスとの関わりからの観点から研究対象とする「Nってある」文の叙述の種類を判断する。まず、(32)について考察する。

- (32) 近藤はようやく思いついた。本当にたった今、頭に浮かび上がったものだが、  
実に相応しい話題に思えた。「ギリシャ文字のθ ってありますよね」  
「ええ」

(森博嗣(2005)『θは遊んでくれたよ』, 講談社, p.20)

これは、(32)のようにテンスを導入させ「θ」の存在を一時的なものとして表すと、文脈にそぐわない文になる。

- (32) # 「ギリシャ文字のθ ってありましたよね」

(32)は「って」に前接する名詞が世の中のどこかに存在する、ということを表している文である。世の中に今あるものについて「存在する」ということはいつでもいえる恒常的なことであるため、(32)は「って」に前接している名詞の内在的属性を表しているといえる。このことから、(32)は典型的な属性叙述文であるため、主題文であると判断することができる。したがって丹羽(1994)が主題文であるとしている(6)も、主題文であるといえるだろう。

- (6) 焼肉食い放題ってあるじゃない。あれで、食いきれずに苦しんでる人が、よくいますよ。<sup>5</sup>

次に、場所が付属している(7)のような「Nってある」文について見ていきたい。

- (7) 駅前にみどりスーパーってあるだろ。あそこ、来週閉店するらしいよ。

みどりスーパーが駅前に存在するということは基本的に変わらないことであり、(7)は「緑スーパー」の恒常的な属性を表している。よって(7)は内在的属性を表す典型的な属性叙述文であり、主題文であるといえる。

(7)にテンスを導入させた(7)は自然な文である。

- (7) 昔駅前にみどりスーパーってあっただろ。

(7)は、現在は「みどりスーパー」が存在しないことを意味しており、「みどりスーパー」の存在は恒常的なものではない。(7)は(32)(6)(7)のような典型的な属性叙述文からは少しはずれた文であり、典型的な主題文であるとはいえないだろう。ただし、「みどりスーパー」はなくなるその瞬間まで恒常的に存在していたことを考えると、(7)は次の(33)と比べたらかなり属性叙述文的な文であるといえるだろう。

- (33) 「ねえ、ジョージさんと一緒にカテキンさんっていたじゃない？」

「うん、仕事仲間だって」

「何処かで見覚えがあるんだけど・・・気のせい？」



(ネット <http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=1382724> 2011年9月10日)  
(33)は以前「ジョージさん」に会った時に「カテキンさん」という人が一緒にいたということを書いてある文である。ジョージさんとカテキンさんが恒常的に一緒にいるとは考えられないので、(33)はかなり事象叙述文的な文であるといえる。よって主題文である可能性はかなり低いといえるであろう。以上のことから、「N ってある」文には主題文ではない可能性が高い文が存在するといえる。

## 6. おわりに

本稿では、「N ってある」文には(33)のような主題文ではない可能性が高い文が存在するということを示した。本研究を行う契機となった先行研究の対立についていえば、丹羽(1994)が主題文であるとした(6)も日本語記述文法研究会(編)(2009)が主題文ではないとした(7)も、ともに主題文である可能性が高いといえる。

(6) 焼肉食い放題ってあるじゃない。あれで、食いきれずに苦しんでる人が、よくいますよ。

(7) 駅前にみどりスーパーってあるだろ。あそこ、来週閉店するらしいよ。  
つまり、日本語記述文法研究会(編)(2009)には再考の必要があるといえる。ただし、丹羽(1994)も名詞に「って」が後接した文の中には主題文ではないものが存在するということを書いていないという点では、再考の必要があるといえる。

本稿では、「って」主題文と同じように名詞に「って」が後接している文の中にも、主題文ではない可能性が高い文が存在することを明らかにした。これにより「って」主題文の定義がより鮮明になり、精密な「って」主題文の研究が可能となることが期待される。

なお本稿に対する意見として、「って」主題文は「は」主題文よりも使用可能な範囲が広いために使用条件の逸脱が可能なのではないかというものがあるかもしれない。これについては今後の課題としたい。

## 注

- 1 本稿では「は」で表される主題文を「は」主題文、「って」で表される主題文を「って」主題文とする。
- 2 本稿では非文法的な文を「\*」で表し、文脈にそぐわない文を「#」で表す。
- 3 近藤(2012)では主題文の成立条件を「主題となる名詞は、聞き手(読み手)が指示対象を特定できるものである」としたが、聞き手(読み手)が指示対象を特定できるか否かは使用条件に関係するものであるため、「話し手(書き手)」と修正した。
- 4 近藤(2012)では主題文の使用条件の逸脱が許容される文として「ノダ」文もあげていたが、「ノダ」文が必ず主題文の形式になるかどうかは再考の必要があると判断し、本稿では使用条件の逸脱が許容される文から削除した。
- 5 (6)および(7)の第一文の叙述の種類の判断の際、第二文の意味は考慮していない。

## 引用・参考文献

- 阿部二郎(2002)「主題を表す「って」について」,『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書 平成 13 年度 V』
- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』,スリーエーネットワーク
- 岩男考哲(2008)「「って」提題文の表す属性と使用の広がり」,『叙述類型論』,益岡隆志(編),くろしお出版
- 大野晋・柴田武(編)(1977)『岩波講座 日本語 9 語彙と意味』,岩波書店
- 尾上圭介(1995)「「は」の意味分化の論理 一題目提示と対比一」,『言語』24 卷 11 号
- 尾上圭介(2004)『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』,北原保雄(監)尾上圭介(編),朝倉書店
- 上林洋二(1988)「措定文と指定文 一ハとガの一面一」,『文藝言語研究 言語篇』14 号
- 北原保雄(1981)『日本語の世界 6 日本語の文法』,中央公論社
- 加藤重広(2004)『シリーズ・日本語のしくみをさぐる 6 日本語語用論のしくみ』,町田健(編),研究社
- 金水敏(1986)「連体修飾成分の機能」,『村松明教授古希記念 国語研究論集』,明治書院
- 近藤真衣(2012)「「N ってある」文における N の主題性 一主題文の使用条件とその逸脱が許容される文の特性の観点から一」,信州大学卒業論文(未公開)
- 久野暉(1973)『日本文法研究』,大修館書店
- 斎藤倫明(編)(2002)『朝倉日本語講座 4 語彙・意味』,北原保雄(監),朝倉書店
- 白川博之(監)(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』,スリーエーネットワーク
- 田野村忠温(1996)「メタ言語とは何か」,『日本語学』15 卷 11 号
- 田窪行則(1989)「名詞句のモダリティ」,『日本語のモダリティ』,仁田義雄・益岡隆志(編),くろしお出版
- 田窪行則(2002)「談話における名詞の使用」,『日本語の文法(4) 複文と談話』,岩波書店
- 竹林一志(2002)「主題提示「って」の用法と機能」,『日本語教育論集』18 卷
- 手塚正昭(2001)「「って」形式の主題」,『宇大言語論究』12 号
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』,くろしお出版
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』,くろしお出版
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論 一指示名詞句と非指示名詞句』,ひつじ書房
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』,ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会(編)(2009)『現代日本語文法 5 とりたて・主題』,くろしお出版
- 丹羽哲也(1994)「主題提示の「って」と引用」,『人文研究』46 卷 2 号
- 丹羽哲也(2000)「主題の構造と諸形式」,『日本語学』19 卷 5 号 4 月臨時増刊号『新・文法

## 用語入門』

- 丹羽哲也(2004)「名詞の定・不定と「存否の題目語」,『国語学』55巻2号
- 丹羽哲也(2006)『日本語の題目文』,和泉書院
- 野田尚史(1984)「有題文と無題文 —新聞記事の冒頭文を例として—」,『国語学』136集
- 野田尚史(1985)『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 1 はとが』,寺村秀夫(監),くろしお出版
- 野田尚史(1996)『新日本語文法選書1 「は」と「が」』,くろしお出版
- 畠山雄二(編)(2009)『日本語の教科書』,ベレ出版
- 藤田保幸(1996)「引用研究と「メタ言語」の概念」,『日本語学』15巻11号
- 藤村逸子(1993)「わからないコトバ, わからないモノ —「って」の用法をめぐる—」,『言語文化論集』14巻2号
- 堀川智也(2009)「主題として機能する格助詞表示の名詞句」,『大阪大学世界言語研究センター論集』1号
- 堀川智也(2010)「日本語の「主題」をめぐる基礎論」,『大阪大学世界言語研究センター論集』4号
- 堀口和吉(1995)『「～は～」のはなし』,ひつじ書房
- 益岡隆志(1987)『命題の文法 —日本語文法序説—』,くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』,くろしお出版
- 益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』,くろしお出版
- 益岡隆志(2008)「叙述類型論にむけて」,『叙述類型論』,益岡隆志(編),くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法 —改訂版—』,くろしお出版
- 三上章(1960)『象は鼻が長い』,くろしお出版
- 三上章(1972)『現代語法序説 シンタクスの試み』,くろしお出版(刀江書院,1953年を復刻)
- 森山卓郎(2000)『ここからはじまる日本語文法』,ひつじ書房
- Sison, Andreea(2004)「テレビ・ニュースのリードにおける主題の特徴について」,『筑波応用言語学研究』11号

(2012年10月24日 受付)

(2013年5月9日 受理)